

【書評】

エチオ - 二・A 著 『新しい黄金律』

武 井 昭

Amitai Eizioni, The New Golden Rule ;  
Community and Morality in a Democratic Society

Akira TAKEI

今日「モラル・ハザード」という言葉がそれなりに重みを持っている。「モラル・ハザード」を「モラルの危機」と訳することができるが、このことは、この言葉が使用されるまでは「モラル」が曲がりなりにも機能していたとみなされていたということになる。したがって、この危機を超越するということは「モラルの復権」を図ることになる。

「モラル・ハザード」という言葉がアメリカで生まれた言葉であるということはいうまでもないが、アメリカはそれだけ「モラルの危機」に見まわれていることになる。こうした危機感から良識あるアメリカの知識人が立ち上がった。こうした人たちのことを「コミュニタリアン」という。その代表者がアミタイ・エチオ二である。その彼がこうした運動の考え方を代表して大著を著した。それが『新しい黄金律』（永安幸正監訳・麗澤大学出版会）である。

本稿では、この本が提起している問題を通じて「道徳の復権」の可能性とその限界とその現代的意義を現代の社会経済システムの視点から評論する。

(1) 「古い黄金律」と「新しい黄金律」

「黄金律」という発想は、西欧人に固有のもので、東洋人にはない。「黄金律」は、本来「キリスト教徒として守らなければならない普遍的倫理」のことを言う。西欧人で真摯なクリスチャンであれば、「黄金律」に則して生きることが人間として誤りのない人生を送る「原点」になると考える。

エチオ - 二にとって「黄金律」の中身については余りにも自明のことであるのか、それについては全く説明がなされていない。そこで、監訳者の永安幸正氏の解説から引用すると、「黄金律」、つまり「金のルール」とは、「あなたは、他者から自分にしてもらいたいと欲することを、他者にしてあげなさい」ことをいう。このルールの消極的表現である、「あなたは、他者から自分にして欲しくないことを、他者にはならない」ことを、「銀のルール」という。その他に、「真鍮のルール」として、「親切には親切をもって返しなさい」、「鉄のルール」として、

「罰せられない限り、何をやってもよい」などがある。

こうしたルールをイメージすることを通じて西欧人は人間としての生き方の枠組みを模索するが、生活の中にいかにキリスト教の教えが根強く影響しているかが窺える。

「古い黄金律」の限界について、エチオーニは二つあげている。一つは、あなたが、他者から自分にしてもらいたいと欲することを、他者にしてあげたとき、その人が欲していないときには、両者の間に緊張関係が生まれる。第二は、「古い黄金律」は、主として、「個人と個人の間に関するもの」で、人と人からなる「コミュニティ」については全く考慮していない、ことである。

エチオーニのいう「新しい黄金律」は、「あなたは、あなたの自律を尊重し支持してほしいと願うように、社会の道德秩序を尊重し支持しなさい」と明言されている。「古い黄金律」の場合には「自分がしてもらいたいこと」と「他人にしてあげること」は同じ内容であることを前提にしているのに対して、「新しい黄金律」の場合には、「自律の尊重」と「社会の道德秩序」は同一の内容ではないため、この両者がど

のような関係にあるのかが問題になる。

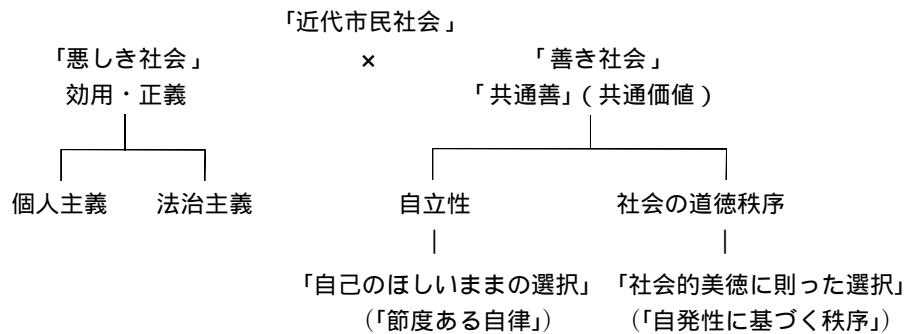
エチオーニは、「自己のほしいままの選択」と「美德に則った選択」の距離を埋め合わせることが「新しい黄金律」が目指すものである、としている。

(2) コミュニタリアニズムと「モラルの声」

エチオーニにとって「善き社会」とは「自己のほしいままの選択」と「社会的美德に則った選択」の距離が埋められた社会ということになるが、彼のいうコミュニティは町や村のような具体的な地域を指していない。「コミュニティ的思考方に立っている組織」の全てをいうため、家族から地球社会までが含まれる。彼はこの意味での「コミュニタリアン」、つまり「共同体主義者」なのである。

このコミュニティ的思考方とは、必ずすべての人が共有できる「共同善」(共通価値)がア prioriに存在することを認めることである。したがって、コミュニタリアンは、個人主義や公共領域を最小限度に限定するのではなくて、どんなに対立するコミュニティ同士であっても必ず「共同善」が存在すると考える人からなる

図1 「新しい黄金律」の構造



「善き社会」を作ろうとする。

その時のキーワードとして、「モラルの声」  
moral voiceがあげられよう。その「モラルの  
声」とは「人々が自ら同意する価値をきちんと  
遵守するよう他の人々に促すものである。」こ  
の声は「内なる声」として、「私は～すべきだ  
と信じている」と発信されているのを日常生活  
で現実に関いているはずのものである。

「コミュニティのモラルの声」もコミュニティ  
に所属している意識があれば、「内なる声」と  
同じようにそのコミュニティのモラルの声が聞  
こえてくるはずである。エチオーニは個人であ  
れコミュニティであれ「モラルの声」を中心  
にした対話、つまり「モラル対話」が行われる社  
会を「善き社会」であるとする。

そこで、エチオーニは、コミュニティを二つ  
の点から定義をしている。すなわち、「コミュ  
ニティとは、メンバー同士で互いに交差し合い  
強化し合うような情緒に基づくネットワーク」  
および「共有価値、規範、意味、および共有す  
る歴史やアイデンティティなど、要するにある  
特定の文化に対するメンバーによる献身」とし  
ている。

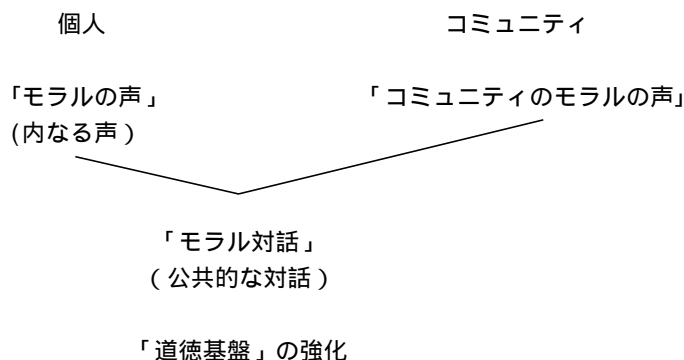
エチオーニは、コミュニティを1) 家族・学  
校・地域、2) 市場・国家・社会、3) コミュ  
ニティのコミュニティ(国際社会・地球社会)  
に分けて「モラルの声」との関連でそれらの本  
質を捉え直している。

「モラルの声」に応答しやすいコミュニティ  
が基礎的コミュニティということになる。その  
場合、当然、家族・学校・地域がその中心にな  
る。この三つのコミュニティで「道德基盤」  
moral infrastructureのレベルが決まる。コミュ  
ニタリアンは、伝統社会への回帰を強制したり  
や郷愁に訴えるのではなくて、夫婦対等の同胞  
結婚のように、時代の変化に応じた形態を模索  
する。エチオーニが考える「モラル」は多くの  
人の同意がえられそうな「道德基盤」のことを  
指しており、各人の具体的な徳目ではない。ラ  
ディカルな徳目は排除するべきものとなる。

そして、コミュニタリアンは、以下の七つの  
中心的要素を尊重してコミュニティが価値の最  
終判定者となるとする。すなわち、

- ①価値としての民主主義 - 手続き民主主義批判、「民主主義は、たとえそれが欠陥を孕むものとしても、最善のシステムであり、

図2 「善き社会」の構図



絶えず完全なものに仕上げられるべきものである。」

- ②憲法と権利章典 - 「多数決原理と少数者の権利保障」の尊重
- ③重層的な忠誠心 - コミュニティのコミュニティへの献身を優先させる必要があることを要請する
- ④中立・寛容・尊敬 - 原理主義の不寛容さの否定、異文化の人たちに対しては、中立の立場で尊敬する態度が望まれる
- ⑤同一性政治 (アイデンティティ・ポリティクス) の制限 - 小グループ内での強固な結束を基礎にした政治の危険性 (派閥政治)
- ⑥社会全体にわたる対話 - 「コミュニティのコミュニティ」について異文化間での「モラル対話」が必要
- ⑦和解 - 「謝罪の公共性」、「許しから改心へ」の七つである。

(3) 「道徳の復権」の可能性とその客観的条件

1990年にエチオーニが中心になって、個人のみならず、コミュニティにおいても「モラルの声」に回答することを求め、「モラル対話」の機会の増加を推進することを多くの人たちに呼びかけ、そのグループを「コミュニタリアン・ネットワーク」という全米的組織を結成した。それに賛同した著名な学者などが400人集まった。そしてその反響は世界的になってきている。

最後に、エチオーニらの「コミュニタリアニズム」が問題提起していることをいくつか取り上げその妥当性について検討することにしよう。

第一は、アメリカ社会に限られてはいるが、エチオーニの「モラルの声」に回答する範囲は

明らかに「近代市民社会」のパラダイムに限られていることである。とくに、手続きとしての民主主義を否定して、民主主義を価値として評価するという古典的な民主主義者の立場に立つと明言している。近代市民社会は「民主主義社会」であると捉えるが、その「民」は「個人主義」individualismのそれと「人格主義」(自律)personalismのそれが混在したものであった。

ところが、現実の歴史は個人主義の民主主義が人格主義の民主主義に優位して発展したために、多くの弊害をもたらしてきた。いまこそ、その誤りに気がつき本来の人格主義の民主主義に戻るべきであるという主張になる。

第二は、個人主義の民主主義の弊害にたいしては社会保守主義者たちが「過剰な法」あるいは「過剰な正義」によって克服してきたとされてきたが、「モラルの声」に回答するならば、多くが不要になるということである。この提言も一般論としては妥当性の高いものであるが、具体的な形態に直すと、新自由主義者たちのそれとほとんど変わらない。つまり、或る意味では陳腐になっている「自助原理」なり「補完性原理」の主張になるということである。

第三は、具体的な政策提案は別にして、エチオーニが現代社会の危機の克服につながるかもしれないという期待がえられるかどうかの可能性についてである。エチオーニがわれわれに投げかけた問題は、一つは「モラルの声」に回答する人間への回帰という形での「道徳の復権」の可能性のそれである。二つは、「個人」の黄金律と「コミュニティ」の黄金律の一致の可能性のそれである。

この二つの問題についてのエチオーニの関心は現代のアメリカ社会にあり、「個人主義パラ

ダイム」と「社会保守主義パラダイム」に対する批判にあるため、現代社会におけるアメリカ社会の限界をポジティブに捉えることにはないことである。

エチオーニが「モラルの声」というときの「モラル」は宗教、倫理、法律などに対峙する「道徳」よりも、他者の立場に立つことに徹する「良心的態度」程度のものの「倫理」であるといわざるをえない。彼の基底にあるものは、個人とコミュニティの関係に妥当するものであり、宗教との関係でも宗教の戒律も社会に適應すれば、倫理的問題でしかないとしており、「倫理律」でしかない。

以上のことから、神と個人の関係のような何にも「負荷されていない関係」において成立する道徳律ではなくて、「共同体や伝統の靱帯に結びつけられた関係」において成立する「倫理律」を考えている。その意味において、エチオーニはまさにゆるやかな「共同体主義者」である。極論すると、アメリカ社会では「道徳の復権」のようなラディカルな動きは不要であると考えているといつてよい。

しかし、世界的にはどうであろうか。近代市民社会のパラダイムに転換した先進国は世界全体から見ると、五分の一にも満たない。その国が世界全体のGDPの80%を生産し、それに見合う資源やエネルギーを消費ないし浪費している。これらの国の豊かさを維持することをそのまま続けておれば、地球や人類は滅亡の危機に陥りかねない。

この事実直面していてもエチオ - ニには「モラルの声」として応答しないのか、こうした問題にほとんど言及していない。彼らが応答しなくとも、世界三大宗教の中で「戒律」のう

ちの「律」の厳しいイスラム教の信者だけが増大している。途上国の多くがヒンズー教や仏教などの伝統的な宗教の「戒律」を守り、近代化を志向してはいないのに対して、先進国では伝統宗教を信じ、実践する人たちは減少の一途を辿る一方で新興宗教の信者は急増している。

世界的にみれば、宗教との関連で「戒」、「律」、「道徳律」の問題が焦眉の急の問題となっているにもかかわらず、エチオーニは途上国の問題は関係する人たちの「モラルの声」によって解決すべきであって、アメリカの場合には、近代市民社会的「善き社会」の実現を図るのが「コミュニティのコミュニティ」についての「共同善」であると考ええる。

以上、「共同体主義」を唱える代表者のエチオーニの新著『新しい黄金律』の内容を紹介し、その問題点について考察してきた。個人とコミュニティを繋ぐ「モラル」をどう構築していくかという問題について正面から取り組む意欲的な好著であるが、しかし、結論的には現代のアメリカの市民社会という枠の中での「黄金律」に限定されているために、その提言も自ずと限られたものになっている。ただ、彼らの主張の中に、アメリカも含めて近代市民社会を「善き社会」と仰ぐ人たちが「モラルの声」に耳を傾けたときに、現在のエチオーニらが到達した「共同善」とは異なったものになる可能性は極めて高いという期待が残されているだけに、今後の展開を見守りたい。

しかし、それを待つだけの時間がどれくらい残されているのかについては不安の方がはるかに大きい。エネルギー危機や食糧危機より早く地球環境の破壊の方が待たなしになる可能性がある。その時には「道徳の復権」のレベルで

は済まないことも十分予想されることを重ねて記しておきたい。

Amitai Eizioni, *The New Golden Rule, Community and Morality in a Democratic Society*,

Basic Books, A Division of Harper Publishers, 1996、『新しい黄金律』、永安幸正監訳、麗澤大学出版会、2001年。

(たけい あきら・本学経済学部教授)